

新 おおさか KEYワード 【第23回】

三人寄れば“サロン”誕生？ 京都の美術館で大阪文化の精髓を見る

街を歩くと“サロン”の看板を見かける。美容関係の店が多く、「茶論」の字をあてた喫茶店もあるが、本来、フランス語の“サロン”は応接室を意味した。それが宮廷や貴族の居宅の応接間に文学者や哲学者、画家、音楽家などが集まって開かれた文化的な会合を指すようになり、現代では一般的に文化人たちが集まる場も意味するようになる。

文化人が集まる“サロン”は、江戸時代から大阪にはあった。ひとつには大阪商人自体が好奇心や芸術的感性に富み、本業とは別に漢詩や学問、書画の世界に遊んだことがある。そこで同好の士が集まったのである。さらに商都大阪には各地より人々が集まる。幕府や諸藩の公務や商用などの往来も多かったが、学問や芸術関係で来阪した人間も多く、地元の文化人たちと交流し、固有の“サロン”文化が生み出された。

たとえば、大阪市立中央図書館（大阪市西区）の横に旧宅碑がある木村兼葎堂（1736～1802）は商人だが、少年時代から知的好奇心が旺盛で博物学を研鑽したり、文人画を描いたほか、珍しい貴重な書物や地図、絵画、博物標本など歴大なコレクションを所蔵したことでも知られる。資料の閲覧を求めて諸国から著名人が訪れ、各地の学者や文人が大坂で知り合うことも多かった。そこに着目した作家で評論家の中村真一郎氏は、大著『木村兼葎堂のサロン』（新潮社、2000年）で兼葎堂を慕って集まった文化人サークルを活写している。

私も大阪という都市を特徴付ける“サロン”文化が以前から気になっていた。誰か一人の指導や統率で会が運営されるのは講座や勉強会だが、気のあった仲間が自然と集まる大阪の“サロン”には、文化的雰囲気や共有して楽しむ傾向があり、どこことなく開放感がある。

大阪文化のエスプリ（精神）である“サロン”をとりあげた展覧会が、京都国立近代美術館（京都市左京区）で開催されている。タイトルも「サロン！雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」（会期3月23日～5月8日）。大坂では自娛（自ら楽しむ）の精神で絵を描いた文



“大坂画壇”も全国発信。京都国立近代美術館のポスター

人が多く、身分や職業に関わりなく交流の輪を作っていたことと、京都の円山・四条派の流れを汲む画家も大坂で活躍しており、二つの都市を結ぶ濃密なネットワークが形成されていたことが開催趣旨に記される。

この展覧会には、文人茶の一茶庵宗家（大阪市中央区）も協力された。大阪には、花月庵鶴翁（1782～1848）を流祖とする煎茶道の名門・花月庵（大阪市天王寺区）もあり、文人趣味を根底に人が集って成立する「煎茶」は、まさに大阪らしい“サロン”文化である。

一茶庵・佃一輝宗匠の茶席に招かれたが、「抹茶」の濃厚さとは雰囲気異なる。掛けられた画や書を鑑賞し、画中の漢詩を読み、画題の検討や、構図や筆致など表現について、ああでもない、こうでもない議論を交わしながら茶をたのしむ。当日の茶会のテーマをにらんで宗匠がひねり出した趣向も千変万化、客の側も掛け替えられる書画に「お次はそうきましたか」と喜々と反応する。茶会のメインは歓談にあり。どっぷりと大阪色に染まって、なるほど“サロン”文化ですなと感心させられる。



「サイエンス・カフェ」コロナ禍以前の写真。現在はオンライン開催。（大阪大学総合学術博物館）

余談ながら、わが大阪大学総合学術博物館で毎年開催する「サイエンス・カフェ」も“サロン”文化に属すると私はにらんでいる。1990年代にパリで創設された「哲学カフェ」なども意識し、お茶を飲みながら専門家と対話し、広く市民に「サイエンス」（自然科学、人文科学）に親んでもらおうという企画である。

なおフランス語の“サロン”には“展覧会”の意味もある。京都と大阪、雅と俗を対比する「サロン！雅と俗」展は、加えて、タイトルに“文化サロン”と“展覧会”の意味が重なるのが偶然かどうか、この配合の妙味は如何にと、お茶を片手に企画者にお尋ねせねばなりませんな。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大坂イメーजी増殖するマンモス／モダン都市の現象—』（創元社）など。